

服装の柄が体型知覚に及ぼす錯視効果に関する研究

甲木 涼麻

本研究では、縞模様に関する「縦縞模様の方が横縞模様よりも体型がスリムに見える」という縞模様通説と平面図形における「同じ大きさの四角形において横縞模様の方が縦縞模様よりも縦長く見える」というヘルムホルツ錯視との矛盾について今まで先行研究が少なかった身長の高さについての定量的な測定を行い、錯視効果によって実際には体型がどの程度異なって知覚されているのかを検証することを目的として行った。更にこの実験の結果から縞模様に限らず、その他の模様についても模様の大きさが大きくなるにつれて錯視効果が大きくなるのではないかという仮説のもとで水玉模様を用いて検証を行った。

1つ目の実験の結果として縞模様の方向に関して縦縞と横縞で有意差があることが分かり、有意差が見受けられた縞模様の方向については、縦縞の方が横縞よりも約 1.065cm 高く知覚されているということが分かった。これは縞模様通説を支持する結果となった。また、交互作用に関してはデューティ比 0.5 の時の縞模様の方向が知覚される身長に及ぼす錯視効果に有意差があることが分かった。この交互作用に関しては、デューティ比が大きいときの方が縞模様を認識しやすくなり、錯視効果が強く現れたためだと考えられ、この結果は Thompson & Mikellidou (2011)のデューティ比が 0.5 のときに錯視効果が大きくなるという実験結果も支持する結果となった。

2つ目の実験の結果として、身長の高さの知覚に関しては水玉模様の大きさが 200pix のときは約 0.4cm 身長が高く知覚され、1600pix になると約 0.7cm 身長が低く知覚されるということが分かった。身体の横幅の知覚に関しては 200pix のときは約 2cm 身体の横幅が細く知覚され、1600pix になると 0.3cm 細く知覚されるということが分かった。これは、模様の大きさが大きくなるにつれて錯視量が大きくなるという仮説には反する結果となった。しかし、本実験においては、さらに大きな pix 数の模様を用いた場合を考慮に入れていない。ファッションにおける長年の課題である体型錯視における重要な議題であるため、さらなる研究により検証されることを期待する。(基礎心理学研究分野)